

『炭俵』全話体句の案じ様：  
「成り変わり」論からみた遣句

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 露口, 香代子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4685">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4685</a>

## 『炭俵』全話体句の案じ様

—「成り変わり」論からみた遣句—

### 露 口 香 代 子

はじめに

遣句は宗祇の頃にそれらしき付け方が認められ、紹巴の頃には一卷における頻度も多くなり、俳諧の連歌に至って俳言がその使用に拍車を掛けたとい<sup>①</sup>う。

貞門までは評価の対象外であった遣句も、談林では、語路よく興ある「よい拍子のやり句」「珍重のやり句」(しぶ団返答)として積極的に認められるようになる。それでも本質的には「行かた句作り」(西鶴獨吟百韻自註繪卷)であり、鬼貫が「其あたり能句のつゝきたらん上か、又ハむつかしき前句にて付かたき所をかるゝとつけのけ侍りて程よくやりたる」(独ごと)と述べる以上の理解を超えることはなかった。

蕉門になると「三十六句皆やり句」(三冊子、あか)の芭蕉の言葉が伝わるごとく、本来の遣句に託された働きはもとより、殊に『細道』行脚以降、遣句にも文芸性を求める姿勢がとられる。これ

は、最早「遣句」といえども、単に一巻の停滞を巧妙に逃れるためだけの便法でなくなったことを意味する。

支考が遣句を付方三法「有心・会釈・遁句」(俳諧十論・俳諧古今抄)の一つに組み入れたことも芭蕉の言の反映と見えるが、ただ、支考の付方三法や七名八体は表現主体の分類で、それによって芭蕉の俳諧を覆い尽くすとは言い難い。

大まかにいえば、支考のいう会釈と遁句は、貞門でいう「あしらひ」<sup>②</sup>に相当し、有心付も、北枝の伝える向付(附方自他伝)の概念に変わらず、支考の真意はともかく、表現論の域を出ない限り、和歌三十体や連歌八十体の類を踏襲した十五条に過ぎないとの見解を免れない。例えば、以下取り上げる、一句全体を話体とみなす「全話体句」<sup>③</sup>の案じ様は、支考が説くところの遁句に属し、かつ向付(有心付)の応用であり、またその場の会釈とも言える性格を持つ。

『炭俵』の読解において、全話体句も単純に「遣句」と見做される場合が多いが、三句のわたりに「遣句」が如何なる働きをしてい

るのか、表現技巧に偏した理解を放れ、作者の意図を汲んで読み取る作業が必要になるかと思う。そして、「全話体句」なる案じ様を探る先に、『炭俵』遣句の文芸性や文芸的意義、延いては、芭蕉俳諧の本質が窺えるものと考えている。

まず、『炭俵』の付合で「全話体句」なる案じ方を想定するに至った箇所、解釈上の不審から述べたい。

『炭俵』<sup>④</sup>(元禄七年六月廿八日)には、芭蕉が一座した歌仙が四巻収まるが、炭俵風の中核に扱われるのは「むめがく」「空豆」「振賣」の三巻である。三巻中、成立の最も早いのが元禄六年十月二十日興行の「振賣」の巻で、翌年四月興行の「空豆」の巻が最も後になる。<sup>⑤</sup>その「空豆」の巻の名残表に、通釈ではどうしても解し兼ねた箇所がある。

① 26 年貢すんだとほめられにけり  
27 息災に祖父のしらがのめでたさよ

芭蕉 袋水  
利牛

この28は誰の立場で詠まれているのだろうか。一句の視点の主体はどこに置かれているのだろうか。

右の疑問に関して、注釈書で多い説を紹介しておく、28は打越26からの人事続きを放れるべく天相に転じたのであり、作者は一句を第三者の視点にとって、客観の立場で詠んだ遣句だという。従っ

て28は、前句の豊饒たる老人の余情を、残暑厳しい「七夕の照り」に移したに過ぎないと解し、前句の「人物の趣」を表わすような景を付ける案じ様も句付の一つとみなす。

仮に上述のごとく、28が「人物の趣」から描き出された景句とすると、前句との具体的な関係は次のような説明で代表されよう——「老年の豊饒が残暑の強烈さに相応し、また七夕の照りが老人の生えあがった額やテラテラした赤ら顔と映り合っている」(伊藤氏)。ただし、この系の解釈では、前句と付句の印象の摺り合わせに終わっていないだろうか。

右の解では前々句26以来、息災な祖父への祝意が及んでおり、これでは三句絡みになる。また、言葉の繋がり観点でいえば、前句27「めでたさ」に対し、28「堪忍ならぬ」はどう読んでも憤慨する様にしか受け取れない。「めでたさ」から「堪忍ならぬ」への意味合はどう読みとればよいのだろうか。素直に読めば、28の一句は「七夕の照り」によって何か困る事態が起きる、との底意以外に解しようがなく、それをいきなり前句の息災な老人の余情に結び付けるには隔たりがあり過ぎると思う。

尤も、例①の利牛に、芭蕉句と同等の実力を求めるべきでないとの見解はあるだろう。だが、名残表の後半といえ、一巻中에서도「むらぐ」と骨折らぬ様に作す(去来抄、修)箇所であり、新風の見せ場でもある。しかも、この一巻は、最新の俳風を先導し披露する意図で『炭俵』に撰入されたのであるから、三十六句中のたった一句でも、「聞へぬ句」(三冊子、くろ)即ち、意味不明瞭な語脈が

あれば、同座の芭蕉が咎めていたはずだろう。

叙上のような当時の状況および芭蕉が一座した興行の意義を考えると、意味のとりにくさも単純に門人の技量不足に帰趨させるわけにはいかない。

となれば、再び原点に立ち戻り、二句のわたりからみた主体の転じを念頭に、解釈を検めてみる必要があるだろう。それというのも、現行の解釈が、当時の芭蕉ら一座の文芸性を正しく受けとめていない可能性があるためである。

概して、難解句ほど諸説紛紛たることが珍しくない。しかし、諸解相違の検討を経て、却って納得のいく一解に到達する場合もある。さらにその一解から、撰集の本質に迫る道筋が見えてくるかもしれない。以上の観測のもとに、以下、例①の諸説の整理から着手してみたい。

## 二

例①28について、先の解釈の視点主体を巡る曖昧な点は、安東氏、阿部氏も抱かれていた不審で、また、古註以来、一句の主体を前句の其人に向かわせる「別人」と読む説も行なわれてきた。<sup>①</sup>

たとえば、阿部氏は、一句はただ残暑を詠んだのではなく「その照りを我慢ならぬと感じてゐる人物が居るわけで、その人は前の祖父とは別でなければならぬ」（傍点筆者）という。その「別人」は、露伴の解釈に従って、働き盛りの人を想定し、場も炎天下に移して

前句27を（直話の体でなく）「咳くやうな体」とみて一句を仕立てたと解された。

然しながら、上記のごとく別人を立てたところで、この別人の登場は唐突の観を免れない。まず祖父に対して新たに別人を向かわせ、その上で其別人の（独言そのものでなく）独言のような体で仕立てる案じ過程は、28の場合、当座の即興性を欠き、別人想定の手続きそのものが複雑過ぎはしないだろうか。

抑、「2627」では、祖父が他の人から褒められる内容であったので、最も明快な主体の転じを考えると、「2728」では、打越に絡む祝意さえ避ければ、祖父其人を主体に据えても何ら障りはないだろう。現に杉浦氏は別案に、「意味の上からつけて考へれば」と意味付になることを断った上で、「前句の老人の田圃に出での独言を思ひよせた」とれない事もない」と述べておられる。

右の杉浦氏別案では、老人の景色への「見込み」に拠る曖昧な説明を排除し、28を祖父の独言そのものとする解釈も否定されなかった。其角の「星合やいかに瘦地の瓜つくり」（元禄三年刊『其袋』も参照すると、すなわち、経験豊かな瓜作りの老農夫が、七夕の照りを見て咳いたことはが直接一句になる（全話体）という解釈である。この解釈に関しての可能性は如何程であろうか。

そこで、打越「2627」に戻って右の解を選択する妥当性を検証していこうと思う。27の諸説にみる解釈上の視点主体を整理すると以下のA・Cとなり、Dは筆者による諸説を参照した折衷案である。いずれも「ほめられる」人物は祖父として、



A(26「らる」を受身とみて)その祖父を、祖父に関係のない第三者の立場から眺めた「客観体」の表現。<sup>10)</sup>

B(26「らる」を祖父からみて目上の人への尊敬ととって)その祖父を褒めた目上の人物のような口ぶりで表現。<sup>11)</sup>

C(26「らる」を祖父その人に対する尊敬とみて)その祖父を褒める周囲の人(家族など)のような口ぶりで表現。<sup>12)</sup>

D(26「らる」を受身と尊敬を兼ねるととって)その祖父に対して関係のない第三者が(即興風に)直接語りかけた全話体の表現。

これによって27の視点主体となり得る候補は、(26の)祖父を褒めた目上の人物・祖父の(家族を含む)周囲の人物・第三者(作者)に絞られるが、どの立場が作者の意図に近いだろうか。

Aは単純に一句を客観体に見做した解釈だが、B・Cは曖昧に「よくな口ぶり」とあるだけで、全くの客観体でもなく、かといって全話体とも明言しておらず、その判断は捨て置かれている観がある。話体か否かは解釈者にとって関心の対象外だったのだろう。とは言え、一句が「めでたさよ」と、感動の間投助詞「よ」で止められているところ、および「らる」が受身でも尊敬でも解し得る点は蔑ろにできない。

27をAのごとく客観体で解すると、前句の年貢を納めて褒められた人が、付句で即「祖父」となる文脈になり、付過ぎが問題となる。Bでも「祖父」の息災を言祝ぐ人が前句で年貢を徴収した人と同一になり、やはり付過ぎる。それならば、Cに従って「祖父」の周囲の人を想定する解釈はどうだろうか。ただ、Cとしても先に述べた

「よくな口ぶり」をどう説明するのか、その際の感動「よ」はどのように解釈されているかが定かでない。

以上を勘案すると、27の一句は客観体のままで解するよりも、「口ぶり」そのものである話体とみた方が感動の「よ」が活かされると思われ、また、前句「らる」も受身、尊敬とも判断のつかない内容なので、結局、折衷案として両意を受ける全話体の付句で解するのがよいのではないだろうか。

次に、「2627」がDとすると、変わる「2728」では前句27の読み改めが望ましい。全話体からの読み直しとは、つまり27の客観体への読み直しである。その上で、解釈に躓いた28の諸説は以下のように整理される。

A祖父の元気な「勢い」(余情)を七夕の炎天の景に移して、第三者の客観的立場でその景色を表現。<sup>13)</sup>

Bその祖父が七夕の炎天に働く様を、別人が眺めて呟くような口ぶりで表現。<sup>14)</sup>

Cその祖父が七夕の炎天下で呟くことばそのもので表現。<sup>15)</sup>

28の視点主体となり得る候補は、祖父その人・祖父を眺める別人・第三者(作者)。先の杉浦氏別案はCに該当するが、筆者がCを推す主たる理由は、作者も十分に注意を払ったはずの三句のわりにある。

すなわち、前句27を客観体に取り成せば、28で再びCのように全話体句で付く余地が生まれるのであり、さらに、28が全話体句であるがために、例①にみる三句の運びは軽快かつ大胆な変化を成し得

るといえないだろうか。これを全くの意味付とみない根拠は、前句  
其人の発話であっても、視点主体の上で前句と付句の距離が保たれ  
ている点にある。

例①を巡る問題は、客観に即した表現でも、その内には主観を蔵  
するという、いわば抒情所懐を含めて客観視する俳諧独自の文芸性  
に由来する<sup>16</sup>。全話体句は、その文芸的特色を最大限に活かした案じ  
方かと思われる。

筆者の28についての不審は、叙上の如く一応の見解を得るに至っ  
たが、それについても、天氣の趣に前句其人の「余情」を読むAに  
は、なぜ多く支持が集まるのだろうか。

人物を象徴する景の付合世界として即思いあたるのが、巻頭歌仙  
「むめが、」の「終宵尼の持病を押へける / こんにやくばかり  
のこる名月 芭蕉」である。おそらく、この付合が28A解釈に影響  
しているのだろうと思う。

芭蕉の菫蕪句に関しては、諸解とも問題なく一致しており、殊に  
余情のをかし味が賞揚されてきた。この場合の「余情」は、たとえ  
ば阿部氏によると、尼と寺・菫蕪によって描かれる名月宴の場があっ  
て、これとは別に尼から菫蕪の侘びた味わいが存する。さらに、尼  
の持病が治まって緊張の解かれてくる感じと、宴の後の気のぬけた  
気分が付合によって醸成されていく関係に成るものという。

28Aという祖父の「余情」と、右の菫蕪句とを比較すると、大き  
な相違がある。それは、菫蕪と前句の尼の侘びた趣が重なる前提に、  
尼寺での名月宴という具体的な場が読みとれる点である。これに比

して28Aでは、上記のごとき具体的設定が明確でない。いずれにせ  
よ、余情の形成には、前句・付句の間で「眼に見て附ける」(芭蕉  
翁二十五箇条夜話)<sup>17</sup>世界を通して暗黙に構築される緻密な言葉の連  
繋<sup>18</sup>が欠かせないのだが、28Aでは菫蕪句のような言葉の関係を確認  
できないままに、解釈の過程で「余情」へ入り込んだ嫌いはないだ  
ろうか。

とは言うものの、巻頭「むめが、」巻の『炭俵』における重要性  
を考え合わせると、例①の解釈にあたり、28Aが巻頭歌仙を視野に  
鑑賞したこと自体誤った方向と思われず、寧ろ、作者なりの巻頭歌  
仙の理解が前提となつて、例①の付合が成つたとみるべきだろう。

では、巻頭歌仙に倣うところがあったとすると、その箇所はどこ  
だろうか。もし、作者が参照したとすれば、それは名月の菫蕪句で  
なく、おそらく次の箇所ではないだろうか<sup>19</sup>。

9 奈良がよひおなじつらなる細基手

野坡

② 10 ことは雨のふらぬ六月

芭蕉

11 預けたるみそとりにやる向河岸

野坡

10は、諸解ともほぼ一致して前句の小商人の詞とつて、天相の  
遣句で軽快に付けたと解す。中には9も話体で前句・付句とも会話  
が続くとする解釈もあるが(阿部氏)、この場合、話体に話体が付  
いては放れすぎるので、9は客観体が自然と思う。

変わる「1011」は、ここでも転じが着実に行なわれているとすれ  
ば、10は客観体を読み改められ、場は郊外から繁華の市中に移つて  
「橋を渡向ふに貸蔵など並び立たる処に預け置し体」(炭俵附応抄)

と解される。味噌を誰に預けたのか、何のために預けたのかなどと穿鑿し過ぎると、この付合も自ずと心付風に見えてくるが、その方向へ深入りしては、作者の意図に外れるだろう。

このように、芭蕉が『炭俵』で第一と評した巻頭歌仙の重みを考慮すれば、例①の全話体句の案じ方も、例②に準じる付合であった可能性は十分にあるだろう。

### 三

一句そのものを話体化する案じ様は、一卷の構成からいうと、人情句が続く局面での平板を避けるための小工夫でしかない。だが、全話体句の存在が『炭俵』風の形成にとって真に意味のある工夫であったならば、編者らの関心度も高かったはずである。そこで、引き続き例②①を視野に入れつつ、野坡・孤屋・利牛による百韻などを通して、彼らの「全話体句」への取組みを探ってみたい。

三吟百韻「子は裸」巻の興行は「空豆」の巻に前後する頃で、こ

こでも人事の続く平板な流れの場で、全話体句の案じ様が試みられている。

③ 17 近江路のうらの詞を聞初て

④ 18 天気の相よ三か月の照

19 生ながら直に打込ひしこ漬

野坡  
孤屋  
利牛

「1718」では、三日月の照加減から雨の降る気遣いがないといった前句の旅人の言葉ととる解（碌翁）が主流だが、その打越に16

「只奇麗さに口すゝぐ水」とあるので、旅人続きとなり、これでは打越からの変化があまりにも乏しい。どちらかというところ、18では二句続いで旅人の感懐は避けられていると思われる。

前句の「聞初」た内容で付けたと解する点は諸解に同じとすると、作者の工夫は、旅人が道すがら浦人の訛り言葉を聞いた設定にある。つまり、付句は作者がその旅人に「成り変わった」上で、一句は、浦人が天気の様子を話している直接の言葉を以て付けたのではないだろうか。

変わる「1819」では、18は例②①に倣って客観体に読み改められ、糠漬けの「へしこ」にするよい時節と取り成した。

例①③は全話体句の内容が天候に偏ったが、話題は天相や時節以外でも設定できる。

同巻名残表に見える次の遣句は、作者の工夫の意図を汲めば、同じく全話体の案じ様が試みられた例かと思う。

79 大水のあげくに畑の砂のけて

④ 80 何年菩提しれぬ栃の木

81 敷金に弓同心のあとを継

利牛  
孤屋  
野坡

この場面は、一般に、「7980」の「砂の中より掘出したる古株」（碌翁）が、「8081」で大屋敷の栃の大木へと、場が畑から屋敷に移ったのみの変化を以て理解されているが、そうすると、80は文字通り付け流しの遣句に終わる。高度な文芸性を狙った付合でないにせよ、作者が俗言「何年菩提」（見当もつかぬ、の意）を使った意識は、もう少し高いところにあっただけではないだろうか。

作者に打越への配慮があり、且つ俗語「何年菩提」に含まれる感覚や滑稽感を活かす意図があったのなら、付合案の一つに全話体句も入っていたはずである。つまり、ここは、まず80が村人の言葉として全話体句で79に付き、変わる「8081」で、前句80は客観体に読み改められた上で、柄の古木のある屋敷が設定されたと解するのが適切だろう。

全話体句の案じ様を意識することで、基本的に前句其人に何を語らせてもよい句作りが出来、これによって例③④も『猿蓑』の風の限界を、歩踏み出しているかと思われる。

ところで、江戸蕉門を意識した撰集創りをする限り、編集構成において無視できない存在が、重鎮の其角と嵐雪だろう。両者とも、新風にさほど関心を示さなかったのは周知の通りだが、其角については『蛙合』(貞享三年刊)・『統虚栗』(貞享四年刊)以来の、編者との特別な関係を重んじた扱いとなった。ただ、嵐雪・野坡・利牛による歌仙「兼好も」の巻をみると、野坡らの側からの『炭俵』風への努力は惜しまれていないように思う。

23 堀が来て娘の世とは成にけり

利牛

⑤ 24 ことしのくれは何も囃はぬ

野坡

25 金の細き御足をさするらん

嵐雪

「23 24」は、前句から「先代からの付き合いをしていた人」を主体に想定し、その人に直接愚痴を言わせた。変わる「24 25」では、前句の愚痴を言う其人を堂守とし(白石氏)、その話主ならばするであろう御身拭いの見込みの行為を現在推量「らん」で想いやった。

この場合、前句を全話体句のまままで理解したあしらいの付方である。意味内容からみると前句の人物に付過ぎるが、「らん」止めによる噂で付けて距離をとっているところに巧さも窺われる。『炭俵』を離れてこの付句を評するならば、打越の「娘」からの恋入れへの配慮や、堂守の「悲しくもまたをかし」(露伴)い句による捌き様も、熟練の作者らしい一定の評価に繋がるだろう。ただし、この一巻の興行が「むめがゝ」の巻を知った後である事実を思うなら、嵐雪の句が全く芭蕉の唱導に頓着しない詠みぶりである点は問題だろう。

「兼好も」の巻の興行も『炭俵』に収める目論見であった野坡にしてみれば、野坡の方から全話体句の案じ様を誘った場面ではなかったかと思う。嵐雪ならば全話体句をどのように読み改めるかが一座で注目されたが、これに噂付で応じた嵐雪句は旧態依然の域を出ず、編者らの期待外れに終わったのではないだろうか。嵐雪の新風への反応はいかにも鈍いように思われる。

#### 四

編者が『炭俵』風の構築に期待したのは、芭蕉を別格とすれば、重鎮の其角・嵐雪ではなく、桃隣だろうと思う。そして、『炭俵』の風を生み出した俳壇の、特に桃隣・杉風らの周辺には、子珊・八桑・太夫などの新入門の人々がいた。

芭蕉がこうした門人に求めたのは、高度な技巧でなく、まして

高い文芸性でもなかったはずである。初心の人々にとって新風に  
いての分かり易い要点は、唯一、表・現・面・に・お・い・て・も・明・快・で・あ・る・こ・と  
で、そうした側面からみても、三句のわたりにおける全話体句の案  
じ様は、深川の初心者俳壇で充分に受け容れられる素地があったと  
察せられる。

たとえば、深川俳壇そのものの撰集『別座鋪』(元禄七年五月八日奥書  
子珊編)

では、全話体句なる案じ様はどのようにとり入れられているだろ  
うか。芭蕉同座の第一歌仙「紫陽花や」と、芭蕉が同座していない第  
三歌仙「若竹の」から例⑥⑦を出してみる。

28 まだ花もなき蕎麦の遅時

杉風

⑥ 29 柴菓の葉もうつすりと染なして

桃隣

30 国から来たる人に物いふ

八桑

「28 29」では、前句の遅時きの蕎麦に読み取れる季節感に  
応じるように、付句29は後ろ付の客観体で付く。変わる「29 30」では、前  
句29は会話の断片と読み直されている。すなわち、付句30で姿を現  
わす「先に「国」から来ていた人」に対して、「今度「国」から出  
てきた人」が直接話しかけたことばとなる。

18 おろし時分と種かつぎ出ヌ

子祐

⑦ 19 雉鳴やけふは二つは暑からふ

八桑

20 祖父の病に小言八百

楚舟

18の種籾のおろし時分(種蒔)は、お彼岸の十日後く八十八夜の  
頃といわれる。この季節を前提に、「18 19」は、雉子が鳴いている  
今日は晴れなので、重ね着しては暑かろう、と作者が推し測る体と

読む。

変わる付句20では、軽い病を煩う祖父と、その祖父に対して小  
言をいう婆が登場する。20が付くには、前句が客観体では語脈が  
通らないので、前句19は、婆か祖父のどちらかの直接の言葉とみた  
い。

そこで、どちらの言葉を前句に想定するのだが、病の祖父其人が、  
婆に対して言ったととるより、婆が病を煩う祖父に向かって「重ね  
着しては今日は暑いだろうよ」と、また小言の一つを言ったと  
みる方が繋がりはよいと思う。

すなわち、「19 20」は、病で「二つ」を着る人物を「祖父」とし  
た上で、20はその祖父に対して婆を向かわせて小言を言わせたとな  
る。ここでも19が全話体で読み直されて成立する三句の運びが、あ  
る程度の意識をもって試みられているのではないだろうか。

このように、『別座鋪』が『炭俵』と共に成果を挙げるに至った  
要因の一つは、撰集作りの中心となった桃隣自身が、全話体句の案  
じ様に逸速く関心を示していたこともあるだろう。

その桃隣の『炭俵』連句「道くだり」の巻の興行は、「振賣」の  
巻にやや先立つ元禄六年の秋で、既に全話体句への取組みとみられ  
る付合が目に見えまる。

9年よりた者を常住ねめまはし

利牛

⑧ 10 いつより寒い十月のそら

桃隣

11 臺所けふは奇麗にはき立て

野坡

10は前句の人物をどう解して付き、11で10はどう解されているの

だろうか。

10の情景を前句の人物の象徴や印象で解さない理由は、例①の「祖父」と「七夕の照り」の付合解釈に同じとする。

そこで、この例でも10を前句9の「年よりた者」其人の呟きの言葉と読めば、問題はなさそうに思われる。しかし、10の作者桃隣ならば、打越に8「近くに居れど長谷をまだみぬ」の「年寄」があつて、ここで再び10の話を「年よりた者」とすれば、観音聞きになることぐらいは承知していよう。それならば、10は前句から読めるもう一人「常住ねめまはず」人物の言葉だろうか。それにしても、年寄苛めをしておいて、10のような言葉を呟いたというのも妙な設定になる。

前句を視野に入れた10「寒さ」には、天相の寒さを主意にして、微妙に人情の冷たさも仄めかされていると読める。冷たさを感じる人が「年よりた者」でなく、また「常住ねめまはず」人でもないならば、第三者の、それも家庭内の事情をよく知る「別人」が想定されたとしか考えられない。その「別人」には、「鬪諍イサカヒ飛水トヘシ」（俳諧小傘）を参照すると、家内のいざこざを傍観する一家の主の立場が適切かと思われる。すなわち、10は、作者自身が家長に成り変わったと呟いた言葉ではないだろうか。

変わる「1011」は逆付で、何か特別な日（夷講など）のために、今日は台所を奇麗に掃き清めて、ふと見上げた十月の空は、いつもに増して寒々としているとなり、前句10は、ごく自然な天相の客観体を読み改められたとみてよい。

同様な全話体句の試みと考えられる例は、名残表にもある。

②7 しいやうに我手に占ウラナヒを置いてみる

利牛

③28 しゃうしんこれはあはぬ商ヒ

桃隣

29 帷子も肩にかゝらぬ暑さにて

野坡

28は、前句27の算盤を弾いてみた商人その人の、直接の言葉で付くと解して問題ないだろう。変わる「2829」で、29が後ろ付ということは、28を全話体のまま読み改めずにつけたと理解するのが素直な解釈だろう。商売にならない原因は「暑さ」にあるとして、前句の商人の話体に対して、説明の29が付く構造とみる。

一巻中で、いずれも全話体句に対して一辺倒に逆付で応じたあたり工夫の余地はあるだろうが、こうした試みが「振賣」の巻以前に始まっていた点も喚起しておきたい。

## 五

さて、『炭俵』の評価といえ、目につきやすい俗談平話の表現、庶民生活世界の素材が前面にとりあげられる。確かにこれらは『炭俵』の第一とすべき特色であるが、一方、看過され勝ちな小現象にも『炭俵』風と呼び得る特徴が認められるはずである。叙上の観点で、「むめがゝ」「空豆」「子は裸」「道くんだり」の各巻に渡る用例に一貫性のある全話体句の案じ方も、存分に『炭俵』らしさを担う要素を成していると思われる。

そもそも、なぜ芭蕉や編者らは『炭俵』で全話体の案じ様を意識

する必要があったのだろうか。

当時の俳壇に蔓延していた手帳俳諧（元禄七年六月二十四日付）（杉風宛芭蕉書簡）の影響

など外的な要因を考慮の外とすると、より本質的な面、つまり『猿蓑』編纂中から浮上してきた芭蕉が思うところの課題解決策として、全話体のような工夫が自ずと生まれてきたのではないかと考える。

猿蓑風の課題を具体的に挙げるとすると、『猿蓑』三吟「市中」の巻に関して、去来が「ちとしづみたる俳諧」（真蹟去来文）と述べる件がある。

右を述べた去来の念頭にあったのは、芭蕉の名吟「浮世の果は皆小町なり」に付けた自身の句「なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ」への自己評とみられる。反省の弁「しづみたる」は、既に『炭俵』の風を知っていた去来の鑑賞眼から観て、前句を承けての転じが甘く、小町の俳を一句の表面に出してしまつた拙さに対して述べたのだろう。それが結果的に一巻の沈滞を作っているという。

「ねばり」は、溯れば『猿蓑』刊行以前からの蕉門の重要課題で、景句の連続に陥る古びの俳諧から逃れ、人事句主導の俳諧へと傾斜していく過程で生じる不可避の問題であつたと言ってもよい。ただし、一巻の流れの上で、特に三句のわたりにおける俳の「ねばり」を具体的に意識し初めたのは、『猿蓑』以降『炭俵』以前の時期で、撰集でいうと『深川』（元禄六年刊）（酒堂編）においてだろうと思う。

『深川』の総体的な評価は「ひさご・猿蓑・深川迄ハ花実相對の躰」（袖日記）との見方になるだろうが、実質は、阿部氏も述べておられるように、たとえば第三歌仙「洗足に」（元禄五年十一月上旬発行）

などは、庶民生活への取材といった面、或いは鮮明な風景描写のあり方にしても、かなり『炭俵』的要素がみられ、寧ろ炭俵風への入り口という側面が重視される。

実際に、猿蓑風の「ねばり」が全話体句の案じ様によってどのように解消されつつあつたのか、『深川』の巻頭歌仙「青くても」から、軍事地戻（貞享式海印録）で知られる一例をみておきたい。

⑩ 25山伏を切つてかけたる関の前

⑪ 26 鎧もたねばならぬよの中

27付合ハ皆上戸にて呑あかし

芭蕉  
酒堂  
嵐蘭

26が付く芭蕉の前句25は、自身の反省の弁も伝わる通り（統猿蓑注解）、謡曲「安宅」の場面が露骨に想起される句作りである。諸解釈も本来軽快に運ぶべき名残表後半の場で、芭蕉がこのような重くれの句を取って出した意図を計りかねてきた。

ここで一つの憶測が許されるならば、懸案の俳の「ねばり」が芭蕉の念頭にあつたことが考えられる。

「青くても」の巻は、当期待の新人であつた珍碩（酒堂）が江戸へ到着して間もない元禄五年九月中旬に巻かれた記念の一巻である。この酒堂や嵐蘭ならば、「ねばり」の課題にどう対処するのか、打越をどのように転じるのか、25は当座の芭蕉が彼らへ投げかけた問い掛けであつたのではないかと思う。

⑩ 26 は、「安宅」の世界を払拭すべく前句を実景に取り成し、そのありさまをもって、付句は客観的な立場から観相の句で承けた。観相を持ち出した案じ様については、手堅いというまでで、この時

点では特に評価に値しないかも知れない。しかし、打越に及ぶ時、26が観相であるが故に三句のわたりにおいて効果的であった事実に気づく。

すなわち、「2627」で場面は一転、重くれを脱し酒宴の席上へと変わるが、これは前句が酒の席での会話と読み改められて可能となった世界である。ただ、この当時の芭蕉は、叙上の運びの巧さは認めても、直ちに確信をもって「全話体句」の文芸性を認めるまでに至っていないかと思われる。その文芸性の覚醒には、例⑩より十ヵ月ほど後の、元禄六年七月上旬興行の歌仙「帷子は」の例⑩、同年九月十三日興行の歌仙「十三夜」の例⑫あたりまで時を要したのではないだろうか。

23 腕かりに來れど折ふしゑびす講

① 24 此あたゝかさ明日はしぐれむ

25 夜あそびのふけて床とる坊子共

32 くゞり細目に明る肴屋

② 33 初産はおもひの外に安かりて

34 借りし屏風を返す夕暮

例①は24が、付句では客観体であったのが、25の前句となつては全話体句へと読み変えられる。例②も33が、付句では後ろ付の客観体であったのが、34の前句となつては全話体句へと読み改めて変化を創り出している。そしていずれも『炭俵』の例①の作者岱水が関わっている点も注目される。

このように、芭蕉も含めて「全話体句」の連衆への浸透は徐々に

あったが、例⑫の興行からほぼ一月後、例⑩の案じ様より深化をみる付合が「振賣」の巻に確認できる。

8 星さへ見えず二十八日

⑬ 9 ひだるきは殊軍の大事也

10 淡氣の雪に雑談もせぬ

「89」の世界で客観体を読み変えられた8の情景に何らかの不

糧の趣があるとみて、夜討ちの軍議の場へと案じたのが9の観相句で、観相の内容をもつて一句全体を大将の言葉とした。

「89」の解釈について、『炭俵』の巻頭「むめがゝ」や「空豆」の巻には見えない比較的重厚な趣に、中には「二十八日」の連想から曾我兄弟の夜討ちの佛を読む説もあるが（安東氏他）、先行する一連の⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿を視野に入れると、この解釈には否定的見解をとらざるを得ない。

9が観相であっても「ねばり」を免れているのは、例⑩と同じく一句を「夜討を前にした大将の下知」（白石氏）そのもので付けた工夫があるためである。大将の直接の言葉で付けることによって、「二十八日」を承けてもその大将が誰かは限定されず、従つて「曾我殿原の御狩場へ出たつもやう」（古集之弁）を描く猿蓑風の展開にはならない。「たゞ前句の暗夜のさまから、夜討の情を探り出した」（杉浦氏）のみの、淡々とした付合になる。

変わる「910」は、前句の9を客観体を読み改めた上で、諸解とも籠城兵士の疲労困憊のありさまで付けたと読む。敢えて言うと、

孤屋

芭蕉

野坡



戦場を逃れていない変化の乏しさは気になる。<sup>48)</sup>

以上のごとく、『深川』の風から『炭俵』の風へと、全体的な変化の潮流に乗って、「全話体句」も例⑩から⑬へ、例⑬から②①へと文芸的認識が深化し確立されたのではないかと思う。

六

『炭俵』全話体句の案じ様が真に風雅の追究のための工夫であったのならば、『炭俵』以降においても一脈を辿ることは可能だろう。現に、芭蕉が上方へ到着した後に興行された歌仙、「牛流す」<sup>49)</sup>(元禄七年)の例⑭・「柳小折」<sup>45)</sup>(同年閏五月)の例⑮・「夕兒や」<sup>46)</sup>(同年六月十五日)の例⑯・「猿養に」<sup>47)</sup>(同年九月初)の例⑰などに全話体句の積極的な試みが窺える。

33 吸物で座敷の客を立たせる

去来

34 肥後の相場を又聞てこい

芭蕉

35 幾口か花見の連にさそはれて

惟然

この主人には、米相場で大金を動かす蔵宿の大旦那が想定される。変わる「34 35」の主体も、その旦那の身にありそうな花見の誘いで、逆付を以て35が付く。この場合は、逆付であるがゆえに前句を話体のまま活かしたところが工夫と解される。先例⑤の嵐雪句が、単なる噂として前句を話体のままあしらった案じ方とは、新風意識の有無の差で読み分けておきたい。

14 惣くやめにしたる洗足

去来

15 打鮠を焼と鱸と両方に

酒屋

16 黒みてたかき樫の木ノ森

素牛

「14 15」は帰毛した其人に据える膳の支度を想い、内儀が台所で料理の段取りを言う場面。変わる「15 16」では、15を客観の視点に置き換えて漁師の心積もりと読み直し、16はその日の漁を終える頃の夕暮れの景で付けた。

11 物一ついふては念仏唱へられ

芭蕉

12 今のあいだに何度時雨る

素牛

13 めきくと川かさむき鳥の声

鳳侶

12は、11の念仏を唱える其人が直接呟く言葉で付く。12を前句其人の言葉と解しても、時雨の侘しさの余情は消滅するわけではなく、むしろその方が実感を伴っているのではないだろうか。変わる「13」は、前句を作者の客観の視点に取り直し、川辺の情景へと転じる。

21 後呼の内儀は今度屋敷から

支考

22 喧嘩のさたもむざとせられぬ

惟然

23 大せつな日が二日有暮の鐘

芭蕉

22は、21の武家屋敷から後妻を迎えることになった家の、使用者らが噂をする言葉であったが、「22 23」では、22を客観体を読み改め、父母の命日などを控え、止むを得ず和解に応じた人の身の上へと転じた。

以上は、芭蕉が一座した張行の様子であるが、全話体句という表

現形を通して『炭俵』が及ぼした影響を挙げるとすれば、例⑭⑮⑯で芭蕉と同座した惟然（素牛）の俳風に触れざるを得ない。殊に芭蕉没後の惟然は、大坂の車庸・舎羅らや、伊丹の鬼貫、姫路の千山らと交流する中で、一句の視点主体を特に意識しない「無我の風跡」<sup>⑮</sup>（元禄十五年刊、車庸編）「まつなのなみ」<sup>⑯</sup>（如牛跋）へと興味を移していった。が、一時的な隆盛をみる惟然の俳風も、結局は收拾すべからざるものに終わる。

では、『炭俵』で文芸性を獲得した全話体句は、芭蕉没後、表現形態のみを惟然の口語俳諧に留めたのかというところ、そうは思われない。芭蕉の膝下で『炭俵』編纂期に修練した作者であれば、三句のわたりにおいて芭蕉が全話体句を案じた意図は理解していただろう。

全話体句は、寧ろ惟然坊の風と隔たったところで、着実に受け継がれていた。例えば、『元禄八年興行の「秋もはや」』の巻（元禄十年刊、李由・許六編）<sup>⑰</sup>。

『韻塞』  
第三歌仙  
⑱ 3暮の月宿へはいれば草臥て  
利牛  
4 何ともしれずうまひ臭サする  
野坡  
5大勢の中で精出す豊さし  
許六

4は「やすくかるきをよしとする」（三冊子、しろ）四句目ぶりで、折しも夕飯時に宿場町に入った旅人の、直接の言葉で付く。変わる「45」では、4の状況を客観の立場に読み直し、場を普請場として、職人が一斉に休憩する中、出張の豊刺だけが作業に精を出している、となる。

元禄十七年前後興行の「擬ふて」の巻（宝永元年刊、岱水編）にも『炭俵』の風に倣った全話体句の行き様がみられる。

⑰ 7 肩脱に咄す桶屋の晝休  
利合  
8 轉突の勝は何に成やら  
岱水  
9 高野迄廻りも切らず病付て  
楚舟

7の「肩脱」を昼休みをとる人夫か職人の様とすると、「78」は、同じく休んでいる桶屋が、彼らと人の噂をする会話の断片であり、変わる「89」では、8の感懐を客観体へ戻し、時を逆行させて、結末として順礼半ばにして病み付いてしまった人があって、その昔、あの博奕で儲けた金はどこに消えたのやら、と付く。

伊勢の団友（涼菟）・支考の風においても、惟然の口語俳諧とはまた別の行き様と理解できよう。『伊勢新百韻』（元禄十一年刊、乙由・反朱編）の「凧の」七吟百韻からも一例を引いておく。

⑳ 74 軍の中に連歌双六  
仄止  
75 夜明かとおもへば雪の降て居る  
反朱  
76 門を出れば河千鳥飛  
唐庭

75は、74の戦場で娯楽に興じる兵士の直接の言葉であったのが、「76」で、前句75は作者の客観的立場に読み直されて、雪明りに外出した河辺の情景となる。

このように、全話体句を変化に取り込む行き方は、実作の上では一卷に一、二箇所あるかないかの目立たない存在ながら、史的観点に立てば、『炭俵』風の自覚のもとに創出された、新たな遣句の行き様であったと言えるのではないだろうか。

最後に、これまでみてきた全話体句の工夫が、芭蕉俳諧においてどのような意義をもつのか言い添えておきたい。

ここにとりあげた全話体句の案じ方は、基本的に前句の其人(又は別人)に成り変わって、直接語らせる変化の発想である。その案じ方を交えて、三句のわりに自・他・景気などの変化をつける。

濱氏の論によると、「成り変わり」の論義——いわゆる自他の説は、蕉門でそれほど発展を見なかったという。濱氏の述べられるように、蕉門俳論としての論義こそ進展をみなかったが、しかし、論と実作とでは事情が異なると考えたい。

蕉風における人情続きの三句のわたりの工夫の原点を探れば、既に『細道』途次の「翁直しの一卷」(山中三吟馬がりて「巻」)に見える「向へて附」ける案じ様に始まっていたと解すべきだろう。また、同巻四句目ぶりの一語を巡る評語に、「かるみ」の概念が認められるという。この両事実は、とりも直さず、『細道』行脚以来、「向付」の工夫と「軽み」の俳風への自覚とが同時に始まっていたと理解されるもので、しかも、芭蕉の「軽み」追究の中核の課題の一つに、自他の工夫があったことを意味する。

現に「翁直しの一卷」を通して自他が論じられ(北枝「附方自他伝」)、『細道』直後の花見歌仙「木のもとに」(ひさこ)では、自他意識を明確に踏まえた俳諧に成果を収めた。「真蹟去来文」にいう

猿蓑風の俳の「ねばり」についても、詰まるところ、人情二句に続く三句目の運びの問題と捉え直してよく、そこに、芭蕉が談林までの連句の文芸観を改め、風雅の確信をもって到達したが、例②「むめが、」の巻にみる全話体句の案じ様だったのでないだろうか。すなわち、「炭俵」全話体句の案じ方とは、『細道』以来に見える自他(成り変わり)の課題の延長線上に生み出されたものであり、さらに言えば、「成り変わり」論の実践によって付合世界の「其場」「其人」を実感させ、かつ軽快で大胆な変化を可能にしてい、ある意味で連句文芸の本質を突く一つの工夫であったと結論付けられる。

(平成二十二年十一月九日 完)

#### 〈本文注〉

- (1) 齋藤義光「連歌の付合におけるやり句について」(『中世連歌の研究』昭和54年)
- (2) 乾裕幸『「あしらひ」考』(『初期俳諧の展開』昭和43年)
- (3) 阿達義雄『江戸川柳の史的研究』(昭和42年) 439頁による語。本稿では惟然坊風の「口語俳諧」と区別するために使用する。
- (4) 天理図書館「わ72・55」本
- (5) 芭蕉関連の年次は主に、今榮藏『芭蕉年譜大成「新装版」』(平成17年)による。
- (6) 『芭蕉翁附合集評註』に「あまりものゝよき事を、堪忍ならぬほどよきといふ俗語あり」とあり、杉浦氏もこの説を採られるが、用例未確認。

- (7) 「つくばひ居たる草履取」(蕉羽集)、祖父を眺める壯者(露伴)。
- (8) 野尻抱影『星の星(新装版)』昭和48年、98頁
- (9) ここでは「全話体句」に対して、第三者の客観的立場で詠んだ句の意で使用する。
- (10) 古註では、古集之弁・月居註炭俵集・秘註俳諧七部集。近現代註では、碌々翁・露伴・岩本・島居の各氏。
- (11) 古註では、蕉羽集、近現代註では、杉浦・浅野・萩原・伊藤の各氏。
- (12) 重友・中村・堀切・白石・安東・阿部の各氏。
- (13) 古註では、俳諧七部集弁解・秘註俳諧七部集。近現代註では、太田・重友・杉浦・中村・堀切・伊藤・浅野・白石の各氏。
- (14) 古註では、蕉羽集、近現代註では、露伴・阿部の各氏。
- (15) 岩本・杉浦(別案)の各氏。
- (16) 中村幸彦「俳諧の客観性」(著述集)二、昭和57年)
- (17) 地巻、寒蓼堂婆心稿、寛政七年魯洲跋(古典文庫「芭蕉伝書集」一、174頁)
- (18) 蕉門では付肌の深さや調和性の性格を強調する方向をとる(今榮藏『「移り」考』『初期俳諧から芭蕉時代へ』平成14年、384～385頁)。
- (19) 杉浦氏も両付合の類似を指摘(三省堂『芭蕉講座』五、267頁)。
- (20) 大内初夫「志太野坡年譜」(芭蕉と蕉門の研究)昭和43年、27頁)。
- (21) 濱森太郎「蕉風付合秘伝『自他の説』」(近世文藝)48、昭和63年)による語。
- (22) 一般には「咄」の案じ様は「案方禁物」の一つ(安政二年曲齋序「蕉門通鑑」など)。
- (23) 元禄七年二月二十五日付許六宛芭蕉書簡(今榮藏『芭蕉書簡大成』平成17年)
- (24) 石川真弘『蕉門俳人年譜集』昭和57年、118頁。
- (25) 『俳書集成』23
- (26) 「雉子が夕方鳴くと晴れ」(和歌山県日高郡)など(鈴木棠三『日本俗信辞典「動・植物編」』昭和57年)
- (27) 元禄七年六月二十四日付杉風宛芭蕉書簡
- (28) 松尾真知子「桃隣年譜稿(上)」(会報<sup>大阪俳文学研究会</sup>)21、昭和62年)
- (29) 『日本国語大辞典第二版』の「寒い」、『角川古語大辞典』の「寒し」に、人情や雰囲気の冷たさを表わす当時の例は見えないが、ここでは「寒々とした人情を天相にうつした遣句」(白石氏)とあるごとく、間接的に上述の意を含むと読む。
- (30) 『去来先生全集』昭和57年、246頁
- (31) 阿部氏「連句抄」八(258頁)に紹介のある通り、三句絡みに読まない解釈もある。
- (32) 元禄三年九月廿六日付芭蕉宛曾良書簡の「例之念入病除不申」(飯田正『蕉門俳人書簡集』昭和47年、340頁)など。
- (33) 貞享三年三月十四日付東藤・桐葉宛芭蕉書簡の「句毎に景を

のみ好候は頓而古く成べし。

(34) 古典文庫『蕉門俳論集』174頁

(35) 『芭蕉俳諧の展望』(平成2年) 247頁

(36) 23 朝露に濡<sup>スレ</sup>わたりたる藍の花

24 よごれしむねにかゝる麦の粉

(37) 15 乗掛の挑灯しめす朝下風

16 汐さしかゝる星川の橋

芭蕉

(38) 『校本芭蕉全集』五(富士見書房、平成元年)

(39) 雲英末雄「翻刻『続猿蓑注解』」(『淑徳国文』26、昭和59年)

(40) (38) に同。

(41) (38) に同。

(42) 「78」では、7「網の者近づき舟に声かけて」に対して8

が全話体句で応じたと解する(頼原・杉浦・白石の各氏)。

(43) 句想の根底に諺「腹が減っては軍は出来ぬ」があるという鑑

賞もあるが(頼原・杉浦・阿部氏)、『俚諺大成』(日本書誌学

大系59)にはこの諺は見えない。尤も、当時この諺が一般化

していたならば、労働の場などに転じたこととすることもできる。

(44) (38) に同。

(45) (38) に同。

(46) (38) に同。

(47) (38) に同。

(48) 堂島米市場の諸蔵米中首位を占めるのは、筑前米・肥後米・中国米・広島米の四蔵米で、この取引が相場を左右する(幸

田成友「江戸と大阪」富山房百科文庫48、平成7年、「第七米」。

(49) 鈴木重雅「広瀬惟然」(『俳句講座3 俳人評伝下』昭和34年)

など。

(50) 古典俳文学大系7『蕉門俳諧集二』

(51) (50) に同。

(52) 「竹冷一六」本

(53) 堀切実「勢新百韵」の俳風(『蕉風俳論の研究』昭和57年)

(54) (50) に同。

(55) (21) の論文。

(56) 宮本三郎「蕉風連句手法の一考察」(『向附』を中心として)、『蕉風俳諧論考』昭和49年)

(57) 尾形仍「軽み」の原点(『俳句と俳諧』昭和56年)

〈解釈参考書〉(付、本文用例番号)

●古註(明治以前)

「炭俵」連句古註集」竹内千代子編、平成7年、①②⑬

「七部集振々抄」振々亭三駱、天明四年序、天理図書館蔵「わ199・

87」、③⑤⑬

「俳諧古集之介」遅日庵杜哉、寛政四年刊(『芭蕉連句評釈』杜哉

復本一郎、昭和49年)、①②③④⑤⑧⑨⑬⑭

「俳諧七部集弁解」著者不明、寛政七年、天理図書館蔵「わ185・55」、

①②③④⑤⑧⑨⑬⑭

「寿身依注」遠藤日人、文化元年成、国会図書館蔵「123・204」、①

②③④⑤⑧⑨⑬

「統繪歌仙」宜麦、文化八年刊、「洒竹・二〇四七」本、⑬

「芭蕉翁附合集評註」佐野石弓、文化十二年刊、「竹冷・三九」本、

①②⑥⑩⑬⑭⑰

「標注七部集稿本」夏目成美、文化十三年以前成（『清心國文』2

号、金井寅之助、昭和34年3月）、①②③④⑤

「月居註炭俵集」著者・年次不明（『文政七年月居没』）『滋賀大國文』

7号、宮田正信、昭和44年）、①②③④⑤⑧⑨⑬

「俳諧鳶羽集」幻窓湖中、文政九年稿成（『山寺芭蕉記念館紀要』

3号、雲英末雄、平成10年）、①②⑥⑬⑰

「七部大鏡」月院社何丸、文政十年刊、天理図書館「わ220・35」本、

①②③④⑤⑧⑨⑬

「七部隣嘶」遠藤日人、天保四年（『俳文藝』18、西村真砂子、昭

和56年）、②③④⑤⑧⑨⑬⑰

「秘註俳諧七部集」伝曉台注、天保十四年成（『未刊国文古註釈大

系』17、昭和11年）、①②③④⑤⑧⑨⑬⑰

「俳諧七部通旨」馬場錦江、嘉永五年跋、「洒竹・一六六四」本、

①⑥⑧⑬

「炭俵附応抄」著者不明、安政三年（草）（『ノートルダム 国語・

第20巻第1号、大内初夫、平成8年）、②（『清心女子大学紀要 国文学編』

「貞享式海印録」原田曲齋、安政六年自序、大阪府立中之島図書館

「子・4・1」本

「七部婆心録」原田曲齋、万延元年奥、「洒竹・一六七七」本、①

②③④⑧⑨⑬⑰

「標注七部集」惺庵西馬述、潜窓々々雄編、元治元年琴堂序、①②

③④⑤⑧⑨⑬⑰

「七部集打聞」岡本保孝、慶応元（三年）成（『国立国会図書館蔵

「七部集打聞」翻刻篇）西村真砂子、昭和61年）、①②③④⑤⑧

⑨⑬⑰

●近・現代註

浅野信『七部集 炭俵註釈』昭和57年、①②⑬

阿部正美『芭蕉連句抄』9（昭和61年）、⑩／10（昭和62年）、⑪

⑫⑬／11（昭和63年）、①②⑥⑭⑮⑯／12（昭和63年）、⑰

安東次男『芭蕉七部集評釈』昭和48年、②／『統芭蕉七部集評釈』

昭和53年、①⑬

伊東月草『連句大概』昭和21年、②

伊藤正雄『俳諧 七部集 芭蕉連句全解』昭和51年、①②⑬⑰

岩本梓石『俳諧七部集新釋』大正15年、①②③⑤⑧⑨⑬⑰

頼原退藏『俳諧七部集』（新日本文庫第一部一）昭和22年、①②

③④⑤⑧⑨⑬⑰／『著作集』8（昭和55年）、①（未完）②⑬

大内初夫『元禄俳諧集』（新 日本古典文学大系）平成6年、⑩

大谷篤藏『芭蕉連句私解』平成6年、⑭⑮⑯

太田水穂『芭蕉連句の根本解説』昭和5年、①②⑬⑰

幸田露伴『評 炭俵』昭和24年、①②③④⑤⑧⑨⑬／『評 統猿蓑』昭

和26年、⑰

- 小林二郎『七部集連句評釋』大正11年、①②③④⑤⑧⑨⑬⑰  
 櫻井武次郎・松尾勝郎『芭蕉講座』4（有精堂）昭和58年、②⑩  
 重友毅『芭蕉の研究』（全集2）昭和46年、①②⑬  
 島居清『芭蕉連句全註解』8（昭和57年）、⑩⑪⑫／9（昭和58年）、①②⑥⑬⑮／10（昭和58年）、⑭⑰⑱  
 白石梯三・上野洋三『芭蕉七部集』（新日本古典文学大系）平成2年、①②③④⑤⑧⑨⑬⑱  
 杉浦正一郎・樋口功『芭蕉講座』5（三省堂）昭和26年、①②⑩⑬⑰  
 高藤武馬『芭蕉連句鑑賞』昭和46年、⑬⑭  
 棚橋碌翁『俳諧炭俵集注解』明治30年（クレス出版『芭蕉資料集成明治篇』7）、①②③④⑤⑧⑨⑬  
 暉峻康隆・中村俊定『連歌俳諧集』（日本古典文学全集）昭和49年、①②⑩⑱  
 中村俊定『芭蕉句集』（日本古典文学大系）昭和37年、①②⑩⑬⑰／『校本芭蕉全集』5（富士見書房）平成元年、①②⑥⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑰⑱  
 浪本澤一『芭蕉七部集連句鑑賞（増補版）』昭和45年、②⑬  
 能勢朝次『連句講義』（著作集）8（昭和57年、②）  
 萩原蘿月（松尾靖秋補訂）『俳諧七部集』下（日本古典全書）昭和27年（昭和48年補訂）、①②③④⑤⑧⑨⑬⑰  
 廣田二郎『芭蕉連句集』（新註國文學叢書）昭和26年、①②⑥⑩⑭⑮⑰

堀切実『松尾芭蕉集(2)』（新編日本古典文学全集）平成9年、①②⑩⑰

柳田國男「俳諧評釈」（『定本柳田國男集』17）昭和44年、③④⑥

〔追記〕拙稿は、故 木村三四吾先生 の追悼の意に代えて執筆した。ゼミの席上、作品読解とは、同時代にどう読まれ、理解され、面白がられたかを明らかにするべきであるとの厳しいご指導に汗顔した日々が想い出される。

興福院 木村先生の墓前に。